

LESSON 46

提供された食品製造の四半期財務データ（2022年第1四半期～2026年第3四半期）を分析すると、「売上規模は順調に拡大しているものの、コスト高騰により利益が激減し、不足する資金を借入（有利子負債）で補っている」という、増収減益および財務体質の悪化傾向が顕著に表れています。

主なポイントは以下の4点にまとめられます。

- ・ 売上高は右肩上がりだが、利益は大幅に減少

売上高は2022年Q1の12,450百万円から、2026年Q3の26,400百万円まで一度も下がることなく増加し続けています。しかし、本業の儲けを示す営業利益は2023年Q2（1,982百万円）をピークに減少に転じ、直近の2026年Q3には204百万円まで急落しています。当期純利益も同様の傾向を示しており、収益力が大きく低下しています。

- ・ 売上原価と販管費の高騰による利益の圧迫

売上は伸びているにもかかわらず売上総利益（粗利益）は2025年Q2（6,931百万円）付近で頭打ちになっており、売上原価の増加ペースが売上の伸びを上回っていることが分かります。さらに、販管費も2022年Q1の3,240百万円から2026年Q3の6,660百万円へと一貫して膨らんでおり、これが営業利益を大きく圧迫する要因となっています。

- ・ 本業のキャッシュフロー悪化と手元資金の減少

事業活動から得られる現金を示す営業キャッシュフロー（営業CF）は、2023年Q4の2,720百万円から減少の一途をたどり、2026年Q3には820百万円まで縮小しています。これに連動して、現金等の残高もピーク時の4,600百万円台（2023年末）から2,050百万円（2026年Q3）まで半減しています。

- ・ 有利子負債の異常な急増

資金繰りの悪化を補うためか、2024年後半から有利子負債が急増しています。2022年から2023年頃までは4,000百万円台で安定していましたが、2026年Q3には23,500百万円まで膨れ上がっており、極めてハイペースで借入への依存度が高まっています。

総じて、事業規模（総資産や売上）は拡大しているものの、利益率の悪化とキャッシュアウトが止まらず、借入金によって事業を回している危険な状態に陥りつつあると言えます。

このデータについて、売上高と営業利益の逆転現象や、負債の急増具合を視覚的に分かりやすく把握するために、グラフなどのインフォグラフィックを作成しましょうか？